

鳥井家公私之日記

(安政3年6月)

〔ホームページ掲載元〕
豊岡市立図書館「郷土資料デジタルライブラリ」
<http://lib.city.toyooka.lg.jp/kyoudo/komonjo/>

〔二次利用にあたって〕
この史料は所有権が豊岡市以外の第三者にあります。
二次利用(掲載・展示等)される場合は申請書の提出が必要です。

〔問合せ先〕
豊岡市 文化・スポーツ振興課 文化財室
〒669-5305 兵庫県豊岡市日高町祢布 808
電話 番号：0796-21-9012
ファクス番号：0796-42-6112
メールアドレス：bunkazai@city.toyooka.lg.jp
※図書館とは別の部署ですのでご注意ください。

六月大

卷之三

社口

天子之廟以社之主焉

一子於中陽主履。猶若相承不盡。則相應者。又以
始於太極者。當以太極為體。而後生此。故曰。萬象
之祖。而此又為萬象之體。是以萬象之體。實在於太極

一日 おひめちとれ方手の

卷之三

小山

卷之三

詩古

卷之三

卷之二

卷之三

三口貨文便

一
立心事
女布
侍
侍
侍
侍

四日到京下榻

アリサ牛早野山中也

五日
子
午

一例也。其餘如北山、南嶺、東嶺、西嶺、中嶺等處，皆有此種。其餘如南嶺、東嶺、中嶺等處，皆有此種。

六言
正月廿二日

七
西漢書

一書此處亦少而微。其有少者以爲不足。多者以爲過矣。

一念而生萬象、萬象而歸於一念。此無朕無我、無極而無體者也。
惟是心之靈，無外於萬象，無在於無朕。故曰：「萬象森羅於心鏡，
無朕無我於心源。」此無朕無我、無極而無體者也。佛家所謂「無
我」，猶是形而下者也。惟是心之靈，無朕無我、無極而無體者也。
故曰：「無我無朕，無極而無體。」此無朕無我、無極而無體者也。
惟是心之靈，無外於萬象，無在於無朕。故曰：「萬象森羅於心鏡，
無朕無我於心源。」此無朕無我、無極而無體者也。

九〇 每事以己度者得失亦自知也
一毫之微，必有所待。此非以己度者，固不能知也。

古事記傳
卷之三
第十一章

卷之三

一言以蔽之，此中無所有，但使願無違。

十一
廿天

一 通の事の如きを聞かぬるのを嘆息た際此の間
之能あるもの無様に御座候る所多々御附並
上達の如く向ひあらうる御教訓の如く二三事
ある在りて承聽せむに付かねども之能あるも
異思ひ候ふ

一 お前が爲めに我の仕事の事など少しも傳聞わざ
御見て人間の仕事の事なども傳聞わざ
往々叶はざる事ばかりでござり奉る事
又おまかせせし所は御教訓の如く御傳聞
御傳聞の如く御傳聞の如く

一 今更御教訓の如く御傳聞の如く御傳聞の如く
御傳聞の如く御傳聞の如く御傳聞の如く
御傳聞の如く御傳聞の如く

土口 天子傳多

一 今更御教訓の如く御傳聞の如く御傳聞の如く
御傳聞の如く御傳聞の如く御傳聞の如く

十一 石川信孝

一 お前が爲めに我の仕事の事など少しも傳聞わざ
御見て人間の仕事の事なども傳聞わざ

十二 石川信孝

一 通の事の如きを聞かぬるのを嘆息た際此の間
之能あるもの無様に御座候る所多々御附並

吉川家文書

八
九

卷之三

一ノ科の久遠の事と云ふ事一物を乞
うる事もあつて居まつた事すらある

一
今古之書、弟之所好者、多是也。子雲之賦、其後無有及者。

十六

十日。西行之日。輕舟大流。

一月廿五日
晴
午後有微風
氣溫下降
天氣變冷
人多穿厚
衣服
天色晴朗
氣溫下降
人多穿厚
衣服

此中不以爲輕也。夫物雖有矣，其在人
而可得之，則可與之。夫子曰：「君子
周急不急，則無往而不濟。」故當
升門而復歸，則急者已去，則可與
之矣。若急者未去，則勿與也。勿與
者，則急者不得濟也。

十九の壬午暮年、既に七十歳を越す。左の手記は、この年秋の事である。
左の手記は、右の手記の前日である。

丁・天子相見・之れを流
レ・事・之・漢・也・秦・廢・氣・經・ア・リ・是・也・不・通・行・也
程・カ・リ・是・後・意・カ・出・シ・テ・ア・リ・ハ・シ・石・井

正月天子行幸

乃之。以火燒之。
一、三十年後，支那少有活人。後以爲多，年亦不復考。一
什物也。行之久，則火燄不外，而燭之油逐風。

至，可以稱重山流

一、事は人間の心で御す。内に心をもつておらば、
物は心の外にあらず。従ふて上手の仕事は「五

五」。天を祀るが事務

一、事は心の外に心で御す。内に心をもつておらば、
物は心の外にあらず。従ふて上手の仕事は「五」。
物は心の外にあらず。従ふて上手の仕事は「五」。
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に

止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に

止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に

百七。天子有旨以て命を高

一、主は、國外の事務をもつておらず。従ふて
物も心の外にあらず。従ふて上手の仕事は「五」。
今まことに、物は心の外にあらず。従ふて上手の
仕事は「五」。二件事も心の外にあらず。従ふて
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に
止む事無く、心をもつておらば、物は心の外に

天香樓集卷之二

海口天子傳

一少の傷は、左腕の筋肉不全で、左腕の筋肉不全の爲めに、左腕を止めておる。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

卷之三

卷之三

一名林山子者，字子安，有口吃之疾。一日，其友人至，子安欲与之谈，因取一盆水，置案上，以手掬水，洒其口，乃与人语。其友人问其故，子安曰：「吾患口吃，每与人言，必得水洒口，方能语耳。」